

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4.私鉄沿線

4-1

2008年3月23日（日曜）午後9時を少し回った頃、銀座四丁目の交差点を紳士然とした白髪まじりの風貌の酔いどれが、人波に押されるようにして渡っていた。

男は三越の前でやおら立ち止まり、ご託宣が下ったかのように振り向きざま改装中の時計塔を見上げると、今、自分の身に何が起こったのか解せない面持ちをしたまま腹部を両手で抱え込むと、道行く人を巻き添えにして倒れ込んでしまった。

意識が遠のく中で、みぞおち辺りの激痛がぶり返してきた。「救急車を呼んだから」と誰かが言っている。男は銀座英國屋仕立てのスーツの内ポケットをまさぐる様にして携帯電話を掴み出すと必死の形相でプッシュボタンにタッチしていたが、すぐにその目には何も映らなくなった。

堀内昌幸は搬送先の虎の門病院の集中治療室で、あえなく五十五歳の生涯を終えた。死因は膵臓がん末期と診断された。

亡くなる日の前日から西麻布にある真紀のマンションで寛いでいた昌幸は、自身の命日となってしまう翌日、真紀お手製のフレンチトーストでランチをすませてから、東急池上線の池上駅近くのコーポラスの一室にある学生時代からの仲間が土日だけやっている『東京チェスクラブ』へ出かけた。

丁度その日の昼過ぎ、新宿にある『パークハイアット東京』41階の「ピークラウンジ」で知人と合う約束があった真紀の運転するオーディTTクーペで、昌幸は五反田駅まで送ってもらった。

ハザード・ランプを点滅させ停車すると、昌幸は降り際に、ツツとフレンチ・キスを仕掛けた。虚をつかれた真紀は、それでもごく自然に、絡めてくる昌幸の舌を強めに噛んで応えながら、ブリリアントレッドの車体を発進させた。

ここ十数年、昌幸は商用で上京した際、チェスもインターネットサイト経由で指せる時代になっていたが、生身の勝負をしたくて、何度となく時間をやり繰りしては東京チェスクラブへ顔を出していた。

どういう訳か真紀と親密になってからの昌幸は、池上線に乗る度に我知らず口ずさんでしまう歌の一節があった。